

コミュニティウェア(石田亨)

何かいい言葉がないか...と思っていた。グループウェア研究は、企業内のチームを対象にしているように思えた。もっとオープンにインターネットで繋がった人々を対象にしたかった。その頃、神戸大の田中先生(現在京大)、阪大の西尾先生、奈良先端の西田先生(現在京大)と、4大学ミーティングと名づけた合同研究会を年に数回開いていた。そこに、阪大の下條先生も遊びに来ていた。S先生「コミュニティウェアはどうですか」、I「それは、いいですね。そういう言葉があるのですか」、S先生「今、思いつきました」、I「それ、もらいます」。

それから、コミュニティウェアという言葉を使い始めた。カタカナで書くと感じがいいが、communitywareと書くとyの後にwが来て収まりが悪い。土屋先生(千葉大学)にも英語的でないと指摘された。不安を感じながらも、1997年に京都で Social Interaction and Communityware というワークショップを手作りで企画した。当時のCFPを見ると...

In the 1980s, research into groupware was triggered by the advance of local area networks. Groupware typically supports the collaborative work of already organized people. People in a project of the same company synchronously/asynchronously work using workstations connected via local area networks.

グループウェアを「既に組織された人々」の支援と位置づけた。

On the other hand, communityware is intended to support more diverse and amorphous groups of people. We think that communityware will become important with the advance of public communication systems such as the Internet and mobile communications. Communityware typically supports the process of organizing people who are willing to reach some mutual understanding. In other words, compared to groupware, communityware focuses on an earlier stage of collaboration: group formation from a wide variety of people.

コミュニティウェアを「コラボレーションの初期の段階」の支援とし、グループウェアとの違いを強調した。

手作りワークショップは大成功だった。欧米の社会学者や MIT Media Lab などから続々投稿があった。芝蘭会館では熱心な討論が続いた。西田先生(現在京大)がグループ別討論を上手にまとめて下さった。3ルートもあるエクスカージョンを学生が企画し好評だった。(この頃から、研究室にツーリズムの伝統が生まれた?) 十二段屋でのしゃぶしゃぶには、皆大満足で、ベジタリアンまで食べ始めたのには驚いた。新しいアイデアや新しいつながりが生まれた。初めて、ワークショップの意味を体感できた。

前後して、研究室でもコミュニティウェアの研究が始まった。最初のテレビ会議システムは Socia という。スケジュールリングなしで自然に始まるミーティングというコンセプトだったが、実装にはかなり無理があった。しかし、それが次の FreeWalk に繋がる。大スクリーンを用いた Silhouettell も生まれた。両方とも卒論なのだが、CSCW に採録され、日経産業新聞の第1面に載ったのは予想外の喜びだった。モバイルアシスタントの構想が ICMAS96 を舞台に現実のものとなったのもこの頃だ。